vinetur

フランスのブドウ畑衰退対策、10年を経て生産者にエスカ対策の新たな手段

総額2,450万ユーロで約50件のプロジェクトに資金を提供したが、幹の病害やその他の衰退要因は依然として広く見られる

2026年11月9日（月）



フランスのブドウ生産者は、ブドウ畑の衰退に関する国家計画の下で10年間にわたり取り組みが進められた結果、ブドウ畑に影響を及ぼす病害や衰退要因の一部に対処する新たな手段を得た。ただし、被害を抑え込むには至っていない。

Réussir Vigneが11月9日（月）に発表した10年間の検証報告によると、この計画は、ブドウ畑の衰退状況を記録する段階から、現場で実効性のある対策を試す段階へと業界を進める一助となった。この取り組みは2016年4月、ワイン業界と行政が、幹の病害やその他のブドウ樹衰退の原因が増加し、生産者が損失の拡大に単独で直面していたことを受け、連携した対応を目指してパリで始まった。

PNDVとして知られるこの計画は、2024年に名称を国家ブドウ畑持続可能性計画へと変更した。検証

報告によると、8年間で業界団体とフランス政府が総額2,450万ユーロを投じ、約50件の研究プロジェクトに共同出資した。

記事によると、近年の成果の中でも特に明確なのが、ブドウ樹を弱らせ、枯死させることもある複雑な幹の病害、エスカに関するものだ。研究者は依然として病気のメカニズムをすべて解明できていないが、蓄積された成果から、生産者がすでにブドウ畑で活用できる判断フローが作成された。これにより、ワイン生産者は症状を監視し、現場でどう対応するかを、より体系的に判断できるようになった。

もう一つの取り組み分野は、フランスで広がりが懸念されている深刻なブドウ樹病害、フラベサンス・ドレだ。検証報告によると、管理手法の近代化が進められており、現場での調査を容易にするアプリケーションは2027年に運用開始となる見通しだ。検出の迅速化と精度の向上は、生産者のコストだけでなく、ブドウ畑の寿命やブドウの供給にも関わる。病害の圧力による収量減や植え替えが生じれば、ワイン事業全体にも影響が及ぶ可能性がある。

長年にわたり研究され、観察に何年も要するブドウ樹のコート・ヌエについても、生産者が活用できる成果が得られている。Réussir Vigneによると、この研究では遅い時期に剪定する方法の有効性が確認された。また、中期的には、あらかじめ免疫処理を施した、あるいは耐性を持つ植栽用資材の可能性も開けつつあるという。ただし、これらはまだ開発段階であり、幅広い商業利用が可能な状態ではない。

検証報告は、より大きな課題が解消されていないことも明らかにした。計画の発表から10年が経過しても、ブドウ畑の衰退は現場で続いており、気候変動によって、もともと厳しい状況により頻繁なリスクが加わっている。記事は、この計画を問題の解決策として紹介してはいない。むしろ、生産者のより良い判断を支え、研究成果を日々のブドウ畑管理に迅速に生かすための知見や手段、ネットワークを段階的に整備してきた取り組みとして描いている。

研究成果を実践につなげることは、計画の重要な柱となっている。Réussir Vigneによると、新たな解決策をより迅速に生産者へ届けるため、イノベーションの導入ルートが設けられた。この取り組みでは、2組目となる企業グループの選定が進められていた。また、フランスのワイン産地や技術分野を横断した情報発信を強化するため、地域アンバサダー15人のネットワークも設置された。

記事によると、この計画は、研究チームや地域、専門分野の間にしばしば存在する障壁を取り除く一助にもなった。具体的には、かつては個別に取り組まれることの多かった課題が、現在ではブドウ畑に関わる幅広い関係者の参加を得て研究されるようになっている。

2024年以降、持続可能性を重視する計画の方向転換は、支援対象となるプロジェクトにもより明確に表れている。Réussir Vigneによると、すでに4件のプロジェクトが計画の認定を受けており、2026年の公募で選ばれる追加案件は同年秋に発表される予定だ。新たなプロジェクトは病害対策だけにとどまらず、環境圧力に適応しながらブドウ畑の生産性を維持する方法にも目を向けている。

現在研究されているテーマには、ワイン用ブドウの生産量を維持しながら、バイオ炭が炭素貯留や水に及ぼす影響が含まれる。別のプロジェクトでは、生け垣や樹木、土手などの緑地インフラについて、実用的な提言の策定を目指している。また、菌類を餌とする菌食性甲虫がブドウ樹の病害に

果たす役割を調べる取り組みも進められている。

飲料業界にとって、その意義は農学の領域にとどまらない。ブドウ樹の病害は、ブドウ畑が生産性を保てる期間や、植え替えと監視に生産者が費やす費用、さらには季節ごとのブドウ生産の安定性に影響する。病害管理や樹木の耐性が改善すれば、最終的にはワイン生産者が供給を守り、慢性的なブドウ畑の損失がコストや事業計画に与える圧力を一部軽減することにつながる可能性がある。

検証報告は、過去10年間を、フランスのワイン業界が科学的知見の基盤を拡充し、その一部を現場で使える手段へと変え始めた時期と位置づけた。また、取り組みの対象が広がり、病害対策、気候変動への耐性、生物多様性、炭素管理が、ブドウ畑の持続可能性の一環として、ますます一体的に扱われるようになっていることも示した。